

北海道標茶高等学校



一 学校概要

(一) 学校の変遷

本校は、昭和二年四月一日に標茶農業学校として開校してから、数回の課程転換や学科改編を繰り返し、平成二年四月一日に、全日制総合学科四間口として、新たな歴史を刻んでいる。地域資源、学校資源を活かした本校の特色ある教育活動は、文化理解系列、地域環境系列、酪農・食品系列の三つの系列ごとに整理し、身につける能力などねらいを明確にして、新たな教育として平成二七年度より取り組んでいる。現在二二五名の生徒が町内や管内から学びにきている。



農場概要は、五〇haの耕地に採草地や飼料畑、開放農場、ビニールハウスなど様々な教育資源として活用している。畜産部門では、育成牛約三〇頭、経産牛約四〇頭を有し、高校としては全国で唯一の搾乳ロボットを活用した教育活動を行い、乳質乳量ともに毎年向上すべく運営にあたっている。また、三haの耕地において野菜や草花の栽培を行っている。食品加工では、肉製品と

乳製品を中心に製造実習、販売実習を行っている。

教育課程は、一般的な科目の他に、選択科目として本校だけのオリジナルの授業もある。

(一) 地域の概要

標茶町は北海道の東側、釧路管内のほぼ中央にある酪農が盛んな町で、その面積は、日本全国の町村では六番目に広く、南部には、国立公園である釧路湿原を有している。

摩周湖の伏流水をはじめ豊富な水資源が標茶町にはあり、酪農を中心とした農業が展開されている。全体の農業経営体数は、農林業センサスから、三四四経営体あり、畜産計は肉用牛八二経営体、乳用牛二六五経営体と約七七%が酪農業に従事している(表1)。

表1 農業産出額および農業経営体数(標茶町)

	農業産出額 (推計)		農業経営体数
	合計	2,461 千万円	
耕種計	83 千万円		
米	-		-
麦類	-		-
雑穀	1 千万円		-
豆類	0 千万円		1 経営体
いも類	0 千万円		-
野菜	80 千万円		11 経営体
果実	-		-
花き	X		1 経営体
工芸農作物	-		-
種苗・苗木類・その他	X		-
畜産計	2,378 千万円		
肉用牛	210 千万円		82 経営体
乳用牛	2,164 千万円		265 経営体
うち生乳	1,675 千万円		-
豚	-		-
鶏	0 千万円		-
うち鶏卵	0 千万円		4 経営体
うちブロイラー	-		-
その他畜産物	3 千万円		-
加工農産物	-		-

注1：農業産出額(推計)についてはH29年値、農業経営体数についてはH27年値。

注2：農業経営体数の合計は実経営体数のため内訳と一致しない。

資料：農林水産省 (<https://www.maff.go.jp/>)

市町村の姿グラフと統計でみる農林水産業より作成。

【北海道標茶高等学校の教育の深化】

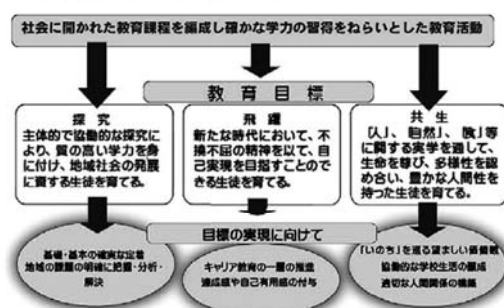


図1 本校の教育目標、実現に向けて

二 教育内容

(一) 総合学科が育てる生徒像

本校の総合学科の理念として、ふるさと
の風土や「いのち」をめぐる体験に学び、
たくましく豊かに生き抜く力を身に付け、
人や地域をつなぎ共に支え合い、社会の発
展に資する人間を育てるため、幅広い選択
科目等を設定し多様な自己実現を支える社

会に開かれた教育課程を編成し、国際理解
や地域文化、農業や環境等に関する体験的
な活動を重視するとともに、知己の理解の
質を高め、確かな学力の習得をねらいとし
た教育活動を推進することにある。

この理念を基に、各教科・科目をはじめ
とした全ての教育活動において主体的・対
話的で深い学びの授業改善と教育効果の向
上を図っている(図1)。

(一) 進路内容

本校の進路状況について、系列を再編成した平成二七年度卒業生から本年度までの五年間を表2に示した。平成二八年までは、就職と進学者は約半数ずつであったが、地

表2 平成27年度から令和元年度までの進路状況

年度	主な進路 大学	国公立 大学	私立 大学	短期 大学	専門 学校	各種 学校	就職 (町内)	就職 (管内)	就職 (道内)	就職 (道外)	公務員	その他	合計 (人数)
平成27年度	8	7	4	16	3	5	28	2	2	5	0	80	
平成28年度	5	7	2	13	4	7	19	3	0	3	0	63	
平成29年度	4	12	7	16	4	6	6	3	0	4	1	63	
平成30年度	4	12	3	16	6	13	10	5	0	5	0	74	
平成31年度	3	8	3	23	2	4	7	10	0	4	0	64	

年度	主な進路 大学	国公立 大学	私立 大学	短期 大学	専門 学校	各種 学校	就職 (町内)	就職 (管内)	就職 (道内)	就職 (道外)	公務員	その他	合計
平成27年度	10%	9%	5%	20%	4%	6%	35%	3%	3%	6%	0%	100%	
平成28年度	8%	11%	3%	21%	6%	11%	30%	5%	0%	5%	0%	100%	
平成29年度	6%	19%	11%	25%	6%	10%	10%	5%	0%	6%	2%	100%	
平成30年度	5%	16%	4%	22%	8%	18%	14%	7%	0%	7%	0%	100%	
平成31年度	4%	11%	4%	32%	3%	6%	10%	14%	0%	6%	0%	90%	
5年間平均値	7%	13%	6%	24%	5%	10%	20%	7%	1%	6%	0%	98%	



図2 高校敷地内 ミニ湿原源流

三 特色ある教育活動

(一) 北海道環境素材を生かした学習活動

域おこしやボランティア活動などの地域行事への提案型参加、生徒による出前授業、地域の自然体験学習会の企画運営など主体的な取り組みによる活動を展開した結果、教育系や自然に関する仕事等を目指す生徒が増え、進学者の増加につながった。

本校の敷地面積は二五五haと公立高等学校で日本一広い高校である。敷地内には軍馬山や山裾の河川周辺には

小さいながら湿原が広がっている(図2)。これら恵まれた環境素材を生かした学習活動を紹介する。

ア エゾシカ角・革の加工と肉の研究

北海道で深刻な環境問題となっているエゾシカを皮革製品として消費者の手に届けることを目的とした活動を平成二八年度より開始した。エゾシカ革を専門に扱うメーカーである合同会社EZOPRODUCT代表菊地隆氏(図3)と出会い、エゾシカレザーを用いたアクセサリーの開発(図4a、b)エゾシカの廃棄問題について情報発信、販



図3 EZOPRODUCT 代表 菊地 隆氏



図4 aチャックの引き手
bデザイン

売とクラフト体験を行いエゾシカレザーの良さを地域へ伝える活動について研究した。また、エゾシカ肉の研究は平成二九年度から、「農ガール」として活動している。これまでに鹿肉ミンチジャーキーを開発・販売した。さらに、標茶町役場や猟友会との交流を通して、適正な個体管理の研究として、校地内でのエゾシカの捕獲に取り組み二頭の捕獲に成功した。

今後、骨角を利用して骨格標本を作製するなど、地域の小学生へ出前授業を予定している(図5)。

イ 河川・湿原・自然・

タンチョウガイド

地域を生かした体験的な活動を通して理解を深め、実践力、表現力を身に付けることを目標とした取り組みをしている(図6)。

環境系科目である自然ガイド入門・応用(二年次・三年次)等の学校設定科目や行事とリンクし、活動を実践している。外部講師を招いて自然体験教育を学ぶ「しべちやインタープリターズキャンプ」や、地域の小学生に対する環境学習会「自然は僕らの学校」、冬季は鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリとの連携により観光客へタンチョウのガイドを実践する「タンチョウガイド」などの行事と連動して授業が展開している(図7)。



◀ 図6 体験的な活動1

▲ 図5 農ガールの活動

ウ 国際理解教育

地域の文化や外国文化、高齢者福祉等の学習を通じて多様な文化や家庭を取り巻く社会状況について理解を深め、文化や生活環境、国の違いを超えて人と人とを結びつけることのできる資質・能力を身に付けさせることを目標として取り組みを実践している。外国クルーズ船ボランティアは、外



図7 体験的活動2

国を支援する人材や、地域を守り支えていく人材を育成するため、地域の自治体や企業、産業界などの関係機関等と協働し、生徒が地域社会の一員としての意識を持ちながら、地域の課題を解決するためのテーマ

(一) 高等学校OPENプロジェクト

国人観光客との交流を通して、英語学習や異文化への興味・関心を高め、授業等で学習した知識や技能を用いて、外国人観光客を案内し、文化などを紹介している。

を設定し、地域とともに解決を図ることをねらいとする研究指定事業「高等学校OPENプロジェクト」に基づいたものである(図8)。



図8 高等学校OPENプロジェクト

一年目は、パフェの商品化までを授業で研究し、標茶町活性化に向けた組織づくりを実施した。高校、役場、農協、商工会、観光協会、初音ミクを手がけるクリプトン・フューチャー・メディアの六団体が高校の活動支援と町の活性化を目的とし連携協定書を調印。組織体制を構築できた。二年目は、オリジナルパフェを商品化し、町民の方々にPR活動を実施した。標茶町をイメージした「うしパフェ」をはじめ三種類のパフェを完成させた。三年目は、「しべパフェ」を町内の飲食店で提供できるようコーディネーターとして活動に取り組むことになる。

(三) 農場HACCP

認証制度の取得

本校は平成二十一年四月に地域の多大なご支援を得て、搾乳ロボット牛舎を導入した。地域の農業環境を生かし、多様化する酪農経営に資する実践的な取り組みを推進し、「生産」から「販売」に至る「経営」



図9 標茶高校農場HACCPチーム

に関する基本的な視野を養ってきた。

搾乳ロボット導入から十年が経過し、様々な農場運営に関する課題が生じてきたことから、事前の危害予測で牛乳の安全性を確保するHACCP導入に向けて取り組むこととした。

NOSA 道東、農協、釧路総合振興局、釧路農業改良普及センター、役場農林課等、農業関連団体でつくる「町酪農HACCP推進会議」の支援体制の下、令和二年二月、乳牛飼育の学校農場としては初となる農場HACCP認証を取得することができた(図9)。

四 おわりに

最近の主な特色を有した教育活動については以上である。今後の課題として、「生徒の主体性」、「学校・家庭・地域の連携」、「ものづくり等を担う人材を育成するための職業教育の充実」等があげられる。本校の学びを通して、人や地域をつなぎ共に支え合い、社会を発展させる人材になると信じている。

※執筆・写真提供は、教諭 嶋英樹先生にご担当頂きました。